

書 評

Galia Ofek, Representations of Hair in Victorian Literature and Culture (Farnham: Ashgate, 2009)

高 橋 裕 子

本書ジャケットの紹介によると、ガリア・オフエクはオックスフォード大学で博士号を取得し、2009年現在、母校であるエルサレムのヘブライ大学で教えている。本書は、ヴィクトリア朝の文学と文化における毛髪（特に女性のそれ）の表象を扱っているが、文学や美術のみならず、社会史や政治史というより広い視野の中でこのテーマを論じている。

まず、内容をごく簡単に紹介しよう。第1章「理論化された髪」では、精神分析学（ことにフェティシズム理論）、人類学、社会学、記号論などの理論的枠組みに依拠し、それらの「モデル」を用いて議論を進めていく方針が述べられる。第2章「ヴィクトリア朝文化におけるフェティシユとしての髪」では、^{かつら}鬘や付け毛の流行と原料としての毛髪の売買の盛況、毛髪製アクセサリーの人気、髪の色と性格の関係をめぐる当時の「科学的」言説などが紹介される。女権拡張運動の興隆によって父権性社会が揺らぎ、女性自身の自己認識にも揺らぎが生じたことが、男女双方における女性の毛髪への過剰なまでの関心の背景にあったとされ、そうした関心の反映として美術作品が示される。また、ファルスの髪を持ち、男性を威嚇する（が、すでに殺されている）「メドゥーサ」と、その長い髪ゆえに男性に救われる（と共に囚われてもいる）「ラプンツェル」という神話的原型が対として提示される。両者は以下の章で実際の作品中に指摘されることになる。第3章「男性小説家によって飼い馴らされた髪」では、ディケンズ、トロロプ、ハーディの作品における髪の記事性が論じられ、第4章「女性作家によって形作られた髪」は、ギヤスケル、エリオット、マーガレット・オリファント、セアラ・グランドの作中の髪の表象の分析にあてられている。第5章「センセーショナルな髪」は、1860年代に

流行した犯罪小説であるセンセーション・ノヴェルにおいて、髪の色による女性のキャラクター設定に変化が生じたことを記す。悪女は黒髪で善良な女は金髪というそれまでの通念に反して、利己的で策略に富む邪悪な金髪（ないし黄色の髪）の女が主役となるのだ。第6章「滑稽な髪」は、髪に対する当時の過剰な関心をメタレベルで扱った視覚的作例として、ジョージ・デュ・モーリエの風刺画とピアズリーによる『サロメ』および『髪の手盗み』の挿絵を取り上げて終わる。

さて、文学ではなく美術を研究対象とする私に本書の書評が委ねられたのは、1996年に上梓した拙著『世紀末の赤毛連盟』で、ほぼ同じ時代と地域における毛髪象徴性を扱ったことによる。本書の著者オフエクは文学研究に軸足を置きながら美術作品にも触れているが、私は反対側から同様のテーマに取り組んだ。そこで以下のコメントも、あくまでも美術史研究者から見た「偏った」ものになることをお断りしておく。

「学際的」研究には、自分の本来の領域でない場にどのように踏み込むのかという問題がつきものである。その分野の専門家の研究成果を参照するのが最も穏当な方法だろう。作品研究に関しては、美術史家が文学作品に、文学研究者が美術作品に、徒手空拳で取り組んでみることもあるにしても、これは初歩的な誤りを犯しかねない危険な方法である。オフエクはこの方法はとらなかったが、専門家の研究を借りる場合にも、領域全体への見通しが不足していると、適切な利用は難しいかもしれない。オフエクはヴィクトリア朝美術における女性の毛髪へのこだわりをもつばら「ラファエル前派」の特徴として理解している。それは必ずしも誤りではないが、例として言及される画家はアカデミー派を含めて多岐にわたっている。定義抜きの「ラファエル前派」というキーワードに頼るのではなく、毛髪象徴性への関心を当時の画家たちがアカデミー派とカラファエル前派といった立場の違いを超えて共有していたことを指摘するほうが、議論としては説得力を持っただろう。

ひょっとすると、著者には個々の美術作品への興味は薄いのかもしれない。本書にはカラーとモノクロ合わせて32点の図版が掲載され、巻頭に「図版一覧」もある。しかし、印刷物の挿絵（の一部）には掲載誌のデータがあるものの、油彩作品については所蔵場所が書かれていない。これは、読者がその作品を自ら追跡することを不可能にするという意味で、引用に注を付けない

のとほぼ等しいルール違反である。また、ハントの《レイディ・オヴ・シャロット》(図2.7)が左右反転しているのは著者の責任ではないが、同じ画家の《イザベラとバジルの壺》(図2.5)が部分図であることには断り書きが必要だろう。

言及されてはいても図版がない作品については、本文中に所蔵先のデータがない以上、読者のアクセスはかなり難しいはずである。そもそも著者も作品を見ていないのかもしれないと思わせる箇所もあった。マグダラのマリアの図像がルネサンス絵画にさかのぼる伝統を持つことを述べ、脚注に「たとえばグレゴール・エアハルトは1515～20年に、マグダラのマリアの髪を、華麗な官能美と裸体を覆う慎み深さを併せ持つものとして描いた」(p.66)と記している。作品の所在についての情報は無いが、私の知る限りでは、グレゴール・エアハルトはドイツの彫刻家で、長い髪が裸体を覆うマグダラのマリアというのは、ルーヴル所蔵の木彫である。彩色されているのはたしかだが、「絵画的伝統」の例としてあげるのに適切とは思われない。

著者の専門であるヴィクトリア朝の文学作品の分析に関しては、髪の色象徴性についてのみ、多少意見を述べたい。私が西欧における髪の色象徴性に関心を持ったのは、「赤毛」の含意の変転に気づいたことによる。裏切り者や痲癩持ちの髪の色として伝統的にマイナス・イメージだった赤毛が、19世紀後半の絵画に頻出し、「美」として讃えられたことにはいかなる理由があったのか、その点に興味を抱いたのである。しかし、オフェクは赤毛への新たな注目に言及するだけで、ほとんど分析の対象とはしていない。彼女の関心は主にブルーネットとブロンドに向かっている。そこで気づかされたのは、赤い髪へのこだわりを特に女性像に限ってみるなら、これはヴィクトリア朝の文学よりも絵画に顕著な現象だったかもしれないということである。拙著ではコナン・ドイルの短編「赤毛連盟」やトーマス・マンの『ブデンブローク家の人々』について文学における赤毛の象徴性を論じたが、前者は赤毛の男性の話であり、後者はドイツの作例だ。私の出発点は、それこそ「ラファエル前派」の絵画だったから赤毛の女性に注目したわけだが、ヴィクトリア朝文学に即するならば、赤毛よりもブルーネットが、さらにブルーネットとブロンドの対比が問題になるというのは否定できない。しかし、両者の解釈については納得しかねるものがある。

当時の「科学」的言説においては、黒髪的女性は情熱的・攻撃的であり、犯罪者になりやすいとされた。「男性的」な能動性を有し、男性を脅かす女性として位置付けられたわけである。他方、金髪的女性は、子供のように純粹で脆弱で受動的な「女性的」女性、男性にとって安全な理想の女性とみなされた。理由の一つとして、西欧人の子供は一般に明色の髪を持ち、長ずるに従って暗色に転じがちだという事実が指摘されている。ここまでは私も意見を同じくするのだが、ブルーネットがマイナス、ブロンドがプラス（センセーション小説のヒロインを別として）という対比しか述べられていないことには異論がある。

まず、ブルーネットの女性には男性を脅かす「妖婦」の役回りしかないかということ、その「男性性」や「強さ」を武器に、男性の協力者として、または単独で、弱者を悪から守ろうとする役割を与えられている場合もある。ウィルキー・コリンズの『白衣の女』（1860年）に登場する黒髪のマリアンがその例で、彼女に守られる繊細な異父妹のローラおよび謎の「白衣の女」は、どちらも薄茶色の髪を持ち主である。他方、ブロンドの記号性も肯定的とは限らない。今日、“dumb blonde”というステレオタイプが存在するが、「頭の弱いブロンド」がヴィクトリア朝の「子供のように」な女性像の延長上にあることは紛れもない。また、より否定的な意味で「子供のように」な、つまり、気まぐれで軽薄で自己中心的な女性が金髪として描かれた例もある。ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』（1872年）に登場するロザモンドがそれで、一方、この小説のヒロインであるブルーネットのドロシアは、誠実で愛情深く、自己犠牲を厭わない気高い（かつ強い）性格の持ち主とされている。

オフエクは本書でエリオットを論じているにもかかわらず、『ミドルマーチ』の女性二人にはまったく触れず、『フロス河の水車場』（1860年）のヒロイン、マギー・タリヴァーの黒髪の方に注目している。その黒髪は、激しい気性や父権的社会における逸脱の象徴とみなされているのだが、マギーについて、当人を孤立させ他者を破滅させるメドゥーサの髪を持ち主という観点からのみ語っているのは単純化のしすぎであろう。子供時代の描写では激しく反抗的な性格が強調されているが、成長したマギーはその愛情の深さと誠実さによって自ら苦しむものの、誰一人破滅させてはいないのである。人好きのするおとなしい従姉妹のルーシーが金髪であるのも型通りであるが、彼女には

自己中心性を含めて「子供のよう」なところはあまり見受けられない。つまり、毛髪の記事性にもさまざまなニュアンスの違いがありうる。『ミドルマーチ』は『フロス河の水車場』の約10年後に書かれ、その間にセンセーション小説の流行があったことを考えると、ここで髪の色を含意をめぐるエリオットの考えに変化が生じたかもしれないという気もする。しかし、それを論じることは私の手に余るし、そうでなくとも紙数がない。

本書から情報として得たものは多い。また、精神分析学や人類学、記号論や構造主義といった分野の研究を広く渉獵してヴィクトリア朝後期の文学と文化の分析に活用しているのは、私の到底なしえなかったことである。しかし、こうした他分野の「モデル」を研究対象に適用しようとするあまり、適用できない部分は大幅に切り捨てられたように思われてならない。何らかの理論的モデルなしには歴史や文化の研究は成り立たないという主張があるとしても、それが「プロクルステスの寝台」になっては困るのである。